

---

# セカンド・エース～二番手な少年と一番な彼女～

中村 左千夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

セカンド・エース／一番手な少年と一番な彼女／

### 【Zコード】

Z6060X

### 【作者名】

中村 左千夫

### 【あらすじ】

鎮国経済大國日本。そこに住む六文高校一年の真田甲斐は、空手の全国大会（男子の部）の優勝経験者であり、学園のテストでも男子の中ではいつも首位になる文武両道の男だが、それ以上の実力を持つ幼馴染の女の子、霧島響子に勝負を挑んではいつも負けていた。

今日も今日とて、彼は連敗記録をストップするために響子に様々な勝負を挑む。そんなある日、日本の福岡と北海道に直径1キロの大きな穴が出現して、そこから侵略者“炎邪”が現れる。

最初は大人たちが戦いに赴いたが、やがて劣勢になると、日常生活を生きてきた少年少女たちは、その侵略者に対抗するために開発された人型兵器サーヴァントを与えられ、戦場へと送り出されていく。

## プロローグ

### プロローグ

軍勢は壊滅状態だつた。

戦え、と鼓舞する上官は声を枯らし切り、その状況に絶望したまま死んだ。

戦場は化物　炎邪の発する歓喜の雄叫びに支配されている。

炎邪とは、全長10メートルを越える獣である。熊のような大型肉食獣タイプもいれば、オオカミにも似た機敏そうなタイプもいる。ただ、全身の毛が炎のよう逆立っているのは共通で、それが名前の由来となっていた。

ある日、炎邪は福岡と北海道に突如出現した直径1キロの大穴“グリーフホール”から這い出でてきた。

それ以来、人類は様々なものを炎邪に奪われ、より多くを奪われないために武器を手に取つて戦つてきた。

戦いの終焉は近く、同時にそれは人類の歴史が終わることと同義だつた。

『大本営から最後の命令を伝える』

通信機からの言葉を聞きながら、少年は意味の無い慟哭を繰り返す。炎邪と対抗できるだけの体格を求めた人類が作り出した対炎邪用決戦兵器“サーヴァント”。通称SVとも呼ばれている操縦席の中である。

『本日1800をもつて、守護作戦は中止とする』

少年は、全長十メートルを越すSVを軽快な動作で地面から跳躍させると、目前の炎邪の迫る。空中で腰の兵装ラックから刃先がチーンソーになつて短剣を取り出し、落下と同時に炎邪の頭部に上から突き刺した。

肉を切り裂く音と同時に、黒い体躯が断末魔の叫びを上げ、それ

から、地響きを起こしそうな鈍重な音を立てて横転し、痙攣したのちに動かなくなつた。

少年はそれを確認することなく、横跳びで傍の炎邪に踊るように飛び掛かる。繰り出される炎邪の黒爪の一撃をかわし、ナイフを腰だめに抱えて、炎邪の胸元に血のりがついた短剣を繰り出す。差し込まれた切つ先からは灰色の体液が噴出し、この怪物も断末魔をあげて息絶えた。

少年は手元の短剣を引き戻すと、その刃を見て眉をひそめた。刃先が根元から折れている。

出撃したときに持つていた装備は、長い戦闘で紛失、もしくは破損していた。いま手元にある短剣だけが、最後の武器だった。

『同時に諸君らの軍属としての任を解く。諸君らは自由だ。残りの時間、各自安らかに過ごしてくれ』

仲間の死臭を察知して多くの炎邪が集まつてきている。

退路を確保していた味方と連絡が取れなくなつてから一時間は経つ。その退路方向から炎邪の群れがやってくるとこうを見ると、理由は考えるまでも無い。

『最後に、諸君らと共に戦えた事は私の誇りである。ありがとう。以上だ』

通信が切れる。

少年は、コクピットの周囲に映し出される刃の欠けた剣をジッと見つめ、乾いた声で小さく笑う。

『みんな。今の通信は聞いたな』

次の通信は、少年の部隊の隊長からだつた。

『あとは好きにしてくれ』

少年は、全てが終わつてしまつたのだと理解した。いつも直接命令を受けていた人物からの言葉は、意識していなくても脳が勝手に認識できた。

レーダーに点灯する敵の数が一秒ごとに増えていく。隊長の声に続き、何人かのすすり泣きが通信機から漏れてきた。まだ生き残つ

て戦っていたのだろう仲間の声だというのはすぐに分かった。

「好きに、か」

もう必要は無いだらう、と考えて少年は通信機のスイッチを切る。

「好きにしろと言つのなら、好きにやらせてもらひた」

少年は短剣を投げ捨て、目の前に立ちはだかる、もはや壁と呼べるような炎邪の集団を睨みつける。

武器は無い。体力も限界。エネルギー切れ寸前のせいか撤退を訴える機体A.Iの警告音すら弱々しい。

「この戦いはお前らの勝ちだが、そんなの俺には関係ない」

少年の意思に反応して、S.Vが一步前に出る。

「俺の望みは、お前らを一匹でも多く地獄に叩きこむことだ」  
勝つとか負けるとか、そんなことはもうどうでも良かつた。  
すでに少年の人生は死んでいる。だから死への恐怖などは微塵もない。

ただ体の動き続ける限り奴らへ殺意を叩き付ける。それだけが、少年が今まで自殺せずに生きることを選んだ理由だった。

一時間後、人類は滅亡した。

### 霧島家の朝の日常

小気味よい音が一般的な木造一階建て一軒家の台所に響いている。包丁の音だ。

真田甲斐の慣れた手つきに操られた包丁が、ツヤ良いキャベツを刻んでいる。

グツグツグツ、と鍋が煮立ってきた。蓋を開けるとふわっと味噌の香りが広がる。昨晩に作った味噌汁の風味が損なわれていない事を確認して、すぐにコンロの火を止めた。

甲斐自身の好みとしては、多少風味が飛んでしまっても沸騰するぐらいの熱い味噌汁が好きなのだが、この家人間は、全員が猫舌持ちなため、温めの味噌汁を食卓に乗せるのが通例だつた。

「さて、お次は」

迷うことなく傍の棚から目的の調理用油を取り出し、フライパンにかける。同時に別容器に卵を溶いて、自作のだし汁を絡ませる。このだし汁は、中学入学から始まつた甲斐の料理人生から三年の月日をかけて開発した鰹だしベースの自信作だつた。こいつを使つた卵焼きは、ちょっとしたきつかけでもあれば甲斐のクラスで争奪戦が始まるほど好評である。

熱せられる油の振動を横目で確認しながら、頃合になつたところで溶いた卵を一気にフライパンに投入。

「ここからが勝負だ、と自分に言い聞かせて、甲斐は神経を研ぎ澄ます。刹那、彼はクワツと目を見開き、小刻みに右手の菜箸を動かすと同時に、左手でフライパンを巧みに操作しながら卵を丸めていく。高温のフライパンで手早く焼き上げられた卵焼きは、マシュマロのような弾力と、宝石のような艶を帶びていた。

出来上がつた自身の最高傑作を皿の上に乗せ、甲斐は自慢げにほ

ほ笑む。

「相変わらず、高校生とは思えない惚れ惚れするような腕前ね」  
台所の入口から声がかした。聞きなれた声だったので、甲斐はフライパンを流し台に運んでから、しつかりと水で浸されたのを確認してから皿を向けた。

そこに立っていたのは、この家の最年長者である霧島文子だった。パジャマ姿なので寝起きなのだろうが、その腰元にも届きそうな髪は一切乱れない。彼女は甲斐より一つ年上で、甲斐の通う六文高校で生徒会長を務めている。学生たちにその評価を伺うと、返ってくるのは、おそらく最上の賛美だろう。性格は慎み深く、人当たりが良く、クラスメイトや後輩にも優しく、それでいて物事への取り組みには甘えが無く、任された仕事は常に依頼以上の出来栄えで完成させる。生徒会長としては、学園始まって以来の最高の有能者との声も多い。

また、容姿も優れており、実際に彼女にあこがれている男子生徒は多く、その人気ぶりは他校からわざわざ彼女を見物にくる人間がいるぐらいだった。

出会つてからすでに5年。訳あって霧島家に出入りするようになつてから4年以上が経過しているが、未だにこうやって一対一で応対すると、甲斐は少なからず緊張してしまう。

「おはようございます。今日は、魚屋さんがサンマを安くしてくれたんでかば焼きにしてみました」

文子は、食卓に並べられたかば焼きに皿を落とすと、熱のこもった息を吐いた。

「かば焼き。あつさりとして、それでいてジューシー。やつぱりこの時期はサンマよね。甲斐ちゃんの料理なら、なんでも美味しいんだけど」

「どーも」

褒められたことにお礼を言いながら、甲斐は再び台所に皿を戻す。そもそも、ナベを使って炊き上げているご飯の火を止めねばならぬ

かつた。この家の人間は、文子も含めて炊飯ジャーより文化鍋で炊きあがつたご飯の方が好みである。時間が無いときなどに炊飯ジャーで炊き上げたご飯を食卓に出すと、文句は出ないが三対の視線の圧迫に晒されるのである。

「そうそう、昨日のゆくゆく大辞典、見た？」

ゆくゆく大辞典とは、日曜の夜中に放送している情報発信番組だつた。この番組で紹介された食品は翌日のスーパーで確実に売り切れるぐらい評判である。

「見ましたよ。茄子特集でしたね」

と、甲斐は火を止めながら応じた。

「私、今日の夕食はマーボ茄子が食べたい」

「別にかまいませんが、その希望は上にいる奴に言つてもうえませんか。当番は俺つて決まったわけじゃないんで」

文化鍋の中を軽くしゃもじでかき回して、蒸らすために蓋をしめる。

「じゃあ、私は顔を洗つてくるから、ウチの眠り姫をお願い。あの子、きっと王子様の到来を今か今かと待ちわびてると思うから」

「忘れられない朝にしてやりますよ」

甲斐は身に付けていたエプロンを手に取つてそれを一度、気合を込めてグッと握り締めた。そのあと、近場の椅子に放ると、文子の傍を通りすぎて二階へ向かう。

「甲斐君」

「情けをかけるつてこりの断りますよ。そんな相手じゃないですから」

「今日、マーボ茄子お願いね」

「いや、だから」

反論しようとしたが、文子は「ナス、ナスおナス〜」という意味不明な歌を歌いながら軽い足取りで洗面台のあるお風呂場に向かってしまった。甲斐は、追いかけるまでの意義も見い出せず、諦めて階段に足を向ける。

あえてドスドスと音を立てて一階の廊下を進み、やがて、一つの扉の前で足を止める。“響子の部屋”という立札があり、当然のことながら甲斐の部屋ではないのだが、彼は遠慮なくドアノブを回した。

中は薄暗かつた。外にはすでに太陽が昇っているのだが、その光をカーテンが遮っているからである。

甲斐は部屋の奥に進み、カーテンを一気に開け放つた。

「うん……」

唸るような声がした。部屋の隅にあるベッドの膨らみからである。

「そろそろ起きよよ」

そのベッドの膨らみに声をかけるが、反応はない。だが、布団はモゾモゾと動いている。

「おい、響子」

「反応は無い。」

「……仕方ないな」

甲斐は布団の膨らみに手を伸ばし、

足を踏み込み、腰を回し、腕を伸縮させ思いつきり拳を叩き込んだ。

空手二段の打撃である。ボフツとした抵抗力のない感触とともに布団が両側に大きく跳ね上がった。

手こじたえは無い。当然だ。こんな不意打ちが通用する相手、だなんて微塵も思っていない。

「朝っぱらから。いい加減にしてくれないか」

背後からあぐび混じりの声がした。甲斐は布団から拳を戻してからゆつくりと振り返る。

立っていたのは、パジャマ姿の少女だつた。

霧島響子。甲斐と同じ六文高校の一年生で、霧島三姉妹の次女である。つまり、先ほどの文子の妹だ。

響子は、学園のファンから表現される、吸い込まれそうでいて大きく、猫科動物のような鋭さを持つた瞳を眠そうに擦りながら、空

いた方の手で肩まで伸びる黒髪をボリボリと搔いていた。ちなみにこちらも寝起きであるのに寝癖が立っていない。三女の寝癖姿も見たことが無いので、もしかしたらこの三姉妹の髪は何らかの特殊素材で出来ていてもおかしくはない。

「毎朝毎朝、婦女子の部屋に遠慮なく足を踏み入れる。その神経はどうかと思つた」

「お前が約束を守らないからだろ」

「はあ？ 約束？」

「寝ぼけるな。俺が一体全体何のために眠たい日をこすつて朝食作りに来てると思つてるんだ」

響子はしづらくボケーとじらりを見つめていたが、やがて鈍重な動きで手を叩いた。

「ああ、そういうやあそ娘娘たな。いや、なんかお前がウチの台所の景色に溶け込みすぎてるから忘れていた」

「」の野郎

額にて血管の脈動を感じる。『けばば自然と拳の握りが強くなる。

「そう怒るなよ」

そして響子は、鼻をヒクヒクと動かした。

「今日はサンマか。ちゃんと飯を作ってくれたみたいだし、きちんと勝負を受けるよ」

「なら、さつさと顔を洗つて道場に来いよ」

そのまま部屋から出ようとすると、ちよつと待てよ、と呼び止められた。

「ここにでやんづか」

響子は両手を腰に廻して、構えもせずにここに放つた。

「なんだと？」

「どうせすぐ終わるんだから、わざわざ胴着に着替えるのめんどくさいだろ。その後もシャワー浴びなきゃなんないし」

「……」

「かかつてくるなら早くしてくれ。腹が減つてる」

と言つて、響子はまた大きく欠伸をした。

甲斐の額に明確な青筋が浮かぶ。どこまでも舐め切つたその態度に、これ以上ないほど腹が立つ。

「俺は別に構わないが」

改めて向き直つて、甲斐は静かに言つた。

「部屋の中が滅茶苦茶になるぞ」

「それはない。せいぜい埃が立つ程度だろ。ほら、そこに置いてある空氣洗浄機、安物なんだが意外に性能良いんだぜ」

あくまで眠たげな顔でそう言つ。

「そうか、それは良かつたな！」

甲斐はそのまま中段に構えて、響子に殴りかかつた。

響子に負けることが悔しかつた。

幼少の時から格闘技だけではなく、スポーツも、勉強も敵わなかつた。

だから挑み続けた。勝負の内容は問わなかつた。二人とも格闘技をやつしている事から取つ組み合いのものが多いが、体育の授業がバスケならバスケ、サッカーならサッカーで勝負して、マラソンならマラソンで勝負した。そして、定期試験の時は、その順位で勝負をした。

それは少学校6年の頃に出会つてからずつと続いている。しかも、一日に何度もだ。勝負については、響子の方もおおむね快く受けるが、中学校に入ると、親がいない三姉妹暮らしで家事をしなければいけないから放課後や早朝の勝負の時間は取れないと断られるよつになつた。

甲斐は、

「負ければ自分が食事を作る、だから勝負しろ」と提案し、やがてそれは霧島家の掃除を肩代わりして、いつの間にか霧島家の空手道

場の手伝いまでさせられる羽田になり、それが高校に入学する頃には日常となってしまった。

そして今日まで、甲斐は一度も響子に勝てていない。

「というわけで、今日はマーボー茄子が食べたいんだけど」食卓の上座に腰かけている文子が言った。

霧島家の居間には、甲斐の準備した朝食が並べられている。

「分かりました……」

茶碗にごはんをよそいながら、甲斐は力なく頷いた。響子との勝負に負けた甲斐は、今晚の食事も作る事になってしまったので、文子の要望を素直に受けるしかなかつた。

「今日は一段と激しかつたみたいね」

アザと傷にまみれた甲斐の顔を見ながら、文子は冷や汗を垂らすと、姉妹共通の大きな瞳を丸くした。

「当然だ」

甲斐の対面に座る響子がふてくされながら言つた。すでに顔も洗つて制服に着替えており、先ほどまでの寝起きと違い、武道家の娘らしく背筋をピンと伸ばしながら味噌汁をすすつている。

「にしても響子。これはあんまりじゃないの？ いつもより甲斐君の顔が5割増しで酷いことになつてるじゃない」

「命を奪わなかつただけでも感謝して欲しいぐらいだ」

その言いように何かを感じ取つたのか、文子は箸の先を口にくわえながらしばし沈黙した後、

「何があつたの？」

はむ、と卵焼きを頬張つて幸せそうな微笑を浮かべながら言つた。

「実は

甲斐が話そうとすると、テーブルが音を立てて揺れた。響子が手に持つたお椀をたたくような勢いでテーブルに置いたからだつた。

「このバカが、あたしの下着を部屋にばら撒いたんだよ」

文子は、またまた目を丸くした後、一日中台所に置きっぱなしにした「」飯のように冷たく、そして乾いた視線で甲斐を見た。

「なるほど。今日は正攻法ではなくかく乱戦法でいったのね。確かに、男性に自分の下着を部屋にばら撒かれたら私も動搖するわ」

甲斐は断固として抗議した。

「ちょっと待て響子！ まるで俺が自分の意思でお前の下着をばら撒いたかのよ！」

「違うの？」

「文子さんもそんな、証拠がそここまくつていっても最後まで私は無罪だと主張し続けながらも無理やりパトカーに乗せられる往生際の悪い性犯罪者を見るような目で俺を見ないで下をこよー。」

「そこまでは思い至らなかつたけど……」

「響子が、俺をタンスに吹つ飛ばしたから、タンスの中の下着が部屋に散らばつた。それだけです」

「それなら、仕方が無いじやない？ そもそも、道場じやなくて自分の部屋で戦おうとしたのは響子、あなたなんじょ」

「でも文姉え。ここつ、散らばつた様々な衣類の中から迷つことなく私のブラを手に取つて、その匂いを嗅いだんだぞ」

「……本当なの？」

「ば、ば、ば、ば、バカ言つな響子。俺は断じてそんなことは

「したじやねえか。私はこの目でしかと見たぞ」

「あれば、お前に殴られて鼻血が出てた上に、殴られた衝撃で視界も定まつてなくて。そしたら、近くに薄くて四角いものが目の前にあつたからティッシュだと思つてだな……」

「それでも、ふつうブラとティッシュは間違えないんじやない？」

「いや、そりやあ文子さんのだつたら間違えないですけど、こいつのは仕方が無、つて響子どうしたんだ？ 台所からフォークをそんなに沢山持つてきて……おうー？」

空気を切り裂くような音がした後、甲斐の顔の横を弾丸のような速さで飛來したフォークがすり抜けた。

「悪かったなー。どうせ私のブラはティッシュと間違えるぐらいいで薄っぺらいよー。」

飛んでくるフォーク時々ナイフの軌道には遠慮が微塵も無かつた。リンクなら余裕で突き刺さるレベルであり、ナイフなら貫通しそうだ。

「ば、バカ。やめろ！」

甲斐は、それらを手元の箸で弾いて器用にプロシクする。「二人とも、それぐらいにして頑張。」飯時にはばれると埃が立つでしょ」

目の前でそんなやり取りが行われていても、文子はひとつ落ち着いて朝食を食べていた。

「でもよ文姉さん」

「響子。私は座りなさいと言つたのよ」

姉に注意されて、攻撃の手を止めつゝも盛大な舌打ちをしながら腰かけた響子だったが、いまだその眼は殺気に満ちており、かつ甲斐を捉えていた。

「甲斐君も。女の子の身体的特徴を貶めるなんて最低よ」

「すみませんでした」

甲斐も「刀流ならぬ」箸流の構えを解いて、おとなしく食卓に戻る。

場が静寂を取り戻してから程無くして、甲斐はふと、気が付いた。

「ところで、桜子ちゃんの姿が見えませんね」

何本かのフォークが叩き落とせずに腕を切つていたので、本物のティッシュで止血をしながら器用に食事を続ける甲斐は、この家の三女の行方を尋ねた。三姉妹の中でも唯一の中学生であり、これから一日を同じ校舎で過ごす文子、響子と違つて桜子とは朝と夜にしか会えないものである。

雑誌のモデルにスカウトされるほどのある可愛い顔を、朝の内にしっかりと押んでおきたいのだが……。

「桜なら修学旅行だ」

響子がムスッとした口調で応える。まだ怒っているらしい。だが、いまはそんな事はどうでも良い。

「なつ、俺は聞いてないぞ！」

思わず立ち上がりてしまつぐらい、甲斐はショックを受けた。

「私は言つて無いし。桜もお前を避けてるしな」

「私はてつきり甲斐君にも伝えてるものだとばかり思つてたわ」

「な、なんてこつた。毎朝桜子ちゃんの顔を見てほつこりするのが俺の日課だというのに！」

「甲斐君のそういう冗談。桜子は本氣で嫌がつてたわよ」

「しかも、“ほつこり”って本来そういう使い方しないしな」

「言葉の意図が伝われば問題ない。些細なことだ」

「桜の気持ちの方は些細じゃないだろ」

甲斐はフツと軽く笑みを浮かべて、自身の黒髪をサラッととかき上げる。

「照れているんだろ」

「あれだけ本人から“死ね”だの“腐れ口リコン犯罪者”だの“キモ。死んでください”だの罵詈雑言を浴びせられていながらもその発想。幸せな思考回路をしてるお前は」

「にしても、修学旅行つてどこに行つたんだ」

と、甲斐は心底がつかりして、力なく座りながら訊ねた。

「京都、とか言つてたかしら」

文子が食べ終わつた食器を片づけながら答えた。

「いつ帰つてくるんです？」

「えつと、確か三泊四日だから、四日後ね」

「四日か。結構あるな」

「さあ、そろそろ学校に行かないと本当に遅刻するわ。二人とも急いで。生徒会長である私の妹と弟分が遅刻なんて許さないんだから」文子の言葉を最後に、甲斐と響子は黙つて残りのおかずを口に放り込む。

こんな感じのやりとりをしながら、霧島家から学校に通つのが甲斐と霧島姉妹の朝の日常だった。

## 1・2友人と生徒会長と

六文高校は、見冬町のちゅうど真ん中にある小山に位置している。校門へは50メートル程の坂道を登る必要があり、学内の運動部では心臓破りの坂として知られている。

季節は秋暮。気温は多少肌寒くはあるものの、衣替えの済んだ厚手の制服でその坂道を全力疾走すれば汗もかぐ。

「私の勝い」

響子の勝利宣言が終わつたぐらうのところ、とうやく甲斐は校門をくぐる事ができた。

霧島家から六文高校までのおおよそ三キロの行程でじゅうが先に学校までたどり着けるか、といつのも恒例の勝負だった。

甲斐は息を切らしながら倒れるように地面に座り込む。

「いやあ、甲斐。今日は惜しかつたな。スーパーきたくらの交差点で瞬獄殺を極められなかつたら、負けてたかもしんないな」

甲斐は息を整える必要があり、すぐに言葉を返せなかつた。

この勝負はお互いへの妨害を可としている。結果として甲斐は朝の騒動以上に生傷を増やすことになつた。逆に、響子は多少は息を切らしてこるもの、このよつやかな軽口が叩ける余裕はあるよつだ。

「化物め」

擦れるように咳くと、すかさず頭部に衝撃。殴られた。痛い。この女の拳は相変わらず、甲斐の知るどんの武道家よりも固くできている。

「だれが化物だ。ああ？」

引きつった顔で迫られる。

「……」

ジッと響子を見ていると、今度は逆の拳が襲いかかってきた。あまりにも強力な一撃だったので、一瞬、頭が無くなつたかと思った。

「まあいいや。私の勝ちには変わりがないわけだし。そうだなあ、

何をしてもらおうかなあ……決めた。帰りに“満腹堂”的絶品饅頭チヨコレートパフェを奢つてもらおつ」

「……分かつた」

一回の勝負に負けるたびに響子の命令を一つ聞く。それが、中学一年の夏に交わした約束だ。黙つてその命令を受け入れる事は酷く屈辱だが、約束を破ることなど、甲斐のプライドが許さない。

「よし、そんじやあいつも通りに一緒に帰ろつ

子供みたいな笑顔を浮かべた後、響子は鞄を肩にかけて校舎の下駄箱に向かっていく。

「相変わらず君たちは仲が良いな」

と、響子の後姿を憎々しげに見ていた甲斐に近づいてきて、冗談にもならない事をサラリと言つのは、武田信一といつ残念ながら男のクラスメイトだつた。あまりの悪い癖毛のボサボサ頭と遺伝的な問題らしく赤い瞳を持つてゐるのが特徴的な少年である。

「おはよう真田君」

「信一か。俺の呼び方は甲斐で良いって言わなかつたか」

信一は外国からこの高校に転校してきてから一週間しか経つていないので、どのクラスメイトに対しても敬語だつた。しかし、なんだかんだで気が合つて今では一緒にいることが多いので、甲斐は信一の事を呼び捨てにしている。それなのに、こちらだけ君を付けられるどどうも背中あたりがムズ痒くなる。

「それと怖いことを言つんじやない」

「怖い」とつて?

「俺と響子の仲が良むかんとかなんとか言つただろ」

「何か問題なのか?」

「誰が仲良くなどするものか。俺があいつのせいでヒラヒラヒラヒラしていく、日々悩んでいるのを知つてゐるだら

はて、と信一は首をかしげた後、

「ああ、この前聞いたあれか。正直、悩みとは思えない悩みだけど

その瞬間、甲斐の中で何かが切れた。

甲斐は黙つて立ち上がると、信一の近くに立つた。

「そうだろうよ。女の子と同棲してお前には、俺の彼女が欲しいという望みはさぞかし滑稽に映るのだろう。そんなに惨めか！？入学早々十連敗の俺がそんなに面白いか！？」

理不尽に迫る甲斐を避けるように、信一は後ずさる。

「何を勘違いしてんだ。同居しているのは外国に住んでる俺の父親の友達の娘であって、お前が考えるような事は一切ない。それに一人で暮らしてるわけじゃなくて、父親の友達の奥さんもいれての三人暮らしだ」

「それでも女の子と同居に変わりは無いだろ。畜生。爆発しろ！」

「おいおい、あの霧島家に出入りしてお前がそれを言うのか」と、信一が反論してきた。

学内だけでなく学外にもその人気が及んでいる上に生徒会長を務める長女の霧島文子。女子を初めとしてのファンが多く、長女同様に文武両道な次女の霧島響子。中学生ながら、雑誌のグラビアでモデル活動を行つていて、部活のバスケットボールで県大会優勝高のキャプテンを務める霧島桜子。

見冬町の美人三姉妹。おそらく、町民でこの三姉妹の存在を知らない方が少ないのでないだろうか。幸か不幸か、そんな霧島家に出入りしている男子は空手道場の子供たちを除けば真田甲斐だけなのだ。

しかし、それは甲斐が望んでそうなつたわけではない。

「好きで出入りしているわけじゃない」

「どうだかな。美人三姉妹の家に出入りしたくてワザと負けてるんじゃないかとの噂だが」

「はははは、面白いなその噂」

「俺が言つてるわけじゃない。だから笑いながら殴りかかってくるな。つていうか結構痛いぞ」

かなり本気で信一に向かつて拳を何度も打ち出しているのだが、信一はそれを片手で難無く払つている。一週間、共に学園生活を送

つてみて分かつたが、信一は運動神経がかなり良く、一年生の中では響子、甲斐に続いて体育の時間では目立っている。

更に信一は頭も良い。スポーツ抜群、そして頭も良く、顔も良いところまでは甲斐と一緒になのだが、甲斐と違つてとにかく信一はモテた。転校してきてから一週間になるが、すでに何人かの女性からアプローチもかけられているという噂だ。

「なんか殴る力がどんどん強くなつてないか」

「そりやあ、強くしてやるからな」

「お前な……」

間に険悪な空気が流れかけた時、甲高い車のクラクションが割り込んできた。

二人が同時に音の方向 校門の方を同時に見ると、乾燥した校庭に土煙を上げながら校内にトラックが入つてきているところだった。

大きなトラックだ。全長10メートルはあるかもしねれない。

「何だあれは？」

拳を振りかぶるのを止めて尋ねると、信一がすぐに応じた。

「SVの輸送トラックだな」

その名を聞いて、甲斐がその正体に思い至るのには少々時間がが必要だつた。

SV。サーヴァントと呼ばれる人型の建設機械である。全長は五メートルから、それ以上のものまで様々ある。多くの建設機械と同じく黄色を基調としたカラーリングをされていて、本体の四角い箱のようなコクピットから胴体に比較すると細めの四肢が取り付けられている。馬力や整備性などにまだまだ問題を残しているものの、二足歩行を生かした悪地での作業や、マニピュレーターによる車両型建設機械では困難な精密作業、人命救出などの分野においてその性能が評価され、大きな建設現場などに行けば数台は見かけるぐらいに普及している。

と、先日のニュースで紹介されていたような気がする。

もつとも、いくら普及していると言つても、学校で見かけるには不釣り合いなものであることは間違いないが。

「なんでSVがウチの高校に？ どこか工事でもあるのか？」

と甲斐が不思議そうに言つと、信一が呆れた様子で答えた。

「来週からSVの操縦は一部の公立高校の体育の授業に組み込まれる事になつたんだよ。先生が言つてただろ」

「へえ、ウチは工業系の学科があるわけでも無いのにな

「そうだな」

「にしても、あんなのの操縦なんて覚えてどうするんだろうな」

「SVはレスキューや精密動作におけるその有用性が立証され始めている他、一昔前なら、専門の操縦者しか乗れないようなものだったが、現在は操縦性の問題もすいぶん改善されて、素人でも数か月の講習を受ければある程度は動かせるようになつていて。今はまだ、他の建設機器に比べて生産数は少ないが、今後の技術進歩によつては建設だけでなく、軍事兵器としての価値も増えてくると予想されている。つまりだ」

甲斐は、信一の言葉に黙つて耳を傾けていた。

「今のうちに多くの若者にSVの操縦を覚えさせておけば、将来的に国にとつては色々と都合が良いのさ。実際、外国では学校がSVの授業をやるつていうのは珍しくない。日本の導入は遅いぐらいだ。特に鎖国をしている日本は、国防について外国の協力も得にくいからな」

「外国。饒舌に説明されるSVの説明などよりも、甲斐にとつて新鮮で興味を引く言葉だった。

鎖国大国日本。

現在、日本は一般市民レベルでは外国とのやり取りができない状態である。

二十一年前、大国同士の対立が激化し第三次世界大戦が勃発した際に、軍隊を持たない日本は中立を宣言し、時の政治家はそれを各国に認めさせることに成功した。さらに世界に対し戦争反対を訴え、

その意思表示の一環として、戦争終結まで日本人の出国と、外国人の入国を禁止とする宣言を発し、それも世界に認めさせた。

結果として、世界に存在する国の9割は戦争を行っているという状態の中、戦死者を二十年間一人も出していないのは日本だけである。

そのかわり、特別な事情があり、かつ国から特別な許可をもらわない限り、一般的の日本人は外国に行くことや、インターネットなどを利用して海外とやり取りすることもできなくなってしまった。一般市民レベルで海外の様子を知ることができるのはニュースで流される外国の映像や、日本国内で放送される日本語吹き替えのドラマや映画ぐらいである。

「信一。お前は特別な許可をもらつて外国に住んでいたと言つたな。外国つてどんなところなんだ」

問いかけると、信一はそのまま黙り込んでしまつた。こちらに返す言葉を吟味しているようでもある。

「いや、そんな深刻に考へないでくれよ。ニュースなんかで世界中戦争ばつかしてゐるつていうのは知つてるんだけどさ。俺も含めてみんな外国なんて行つたことが無いから、外の事には興味があるつていうか」

「すまないが、外国に住んでいたといつても、俺の家があつたのは日本人ばかり住んでゐる日本街で、そこから一歩も出たことが無いんだ」

「へえ、それじゃあさつきの話は?」

「日本人街に来ていた外国人に聞いたんだ」

「なんだよ。お前が見てきたわけじゃないのか」

「期待させたならすまなかつたな」

「まあ、いいけどな。そういうえば、信一はSUVに乗つたことはあるのか?」

「工事現場でSUVのバイトができる基本的な資格は持つてる。もつとも外国のもので、日本じゃ使えないが」

「そりがそりが。それでは特訓の際はお前に声をかけるとしよう」「特訓つて、ソレでも霧島さんと勝負するのか？」

甲斐は当然だとばかりに笑つて見せた。

「そんなに嫌がらず付き合つてくれよ。一緒に帰るときにタイヤキでも奢るから」

「まあ、バイトが無いときは別に構わない」

信一の肩に手を回して校舎に向かつて歩き出す。そろそろ予鈴がなる時間だ。遅刻をすれば朝に文子から釘を刺されたのもあるので後が怖い。

『生徒の呼び出しをします。1-A霧島響子さん、真田甲斐くん、武田甲斐くん。放課後に生徒会室に来て下さい。繰り返します。1-A霧島響子さん、真田甲斐くん、武田甲斐くん。放課後に生徒会室に来て下さい』

「という呼びかけに従つて来たんだけど、何か用か文姉え」

一日の授業も終わり、帰り支度を整えて響子、信一と共に生徒会室に顔を出すと、すでに教室の奥の席には霧島文子の姿があった。

霧島文子は生徒会長である。

いつもなら彼女を補佐する他の役員が居るはずだが、今日は一人だけのようだ。

「よく来たわね。とりあえず座りなさい、三人とも」

文子の誘導に従つて、甲斐は身近な椅子に腰かけた。その隣に響子も座る。

「初めてまして。武田信一です」

信一が腰かける前にペロリと頭を下げる。

(そりがそりが、信一は文子さんと直接こうやって話すのは初めてか  
信一は少々緊張した面持ちだった。おそらく学内では才色兼備で有名な文子と話すことに、少なからず動搖しているのだろう。その

気持ちちは、甲斐にもよく理解できた。

当の文子は、信一の心情を察したのか温かに微笑んで見せた。といふか、おそらくそういう反応をされるのに慣れているんだろう。「そういえば、あなたとは初対面に等しかったわね。初めまして。私は霧島文子。そこにいる響子の姉で、この学園の生徒会長を務めています」

「霧島先輩の事はもちろん知っていますよ。有名人ですから」と、信一はどこか恐縮した様子で席についた。

「私もあなたの事は知ってるわ。転校早々学園随一の不良と仲良くなつた子だものね」

「信一。お前、そんなのと付き合つてたのか。すぐに縁を切つた方がいいぞ」

甲斐が友人の身を案じて言つてやると、文子はその細い指を額に当てて顔を振つた。

「あなたの事を言つてるのよ。『真田君』」

甲斐が反応するには少し間が必要だった。

「えつ、俺？」

「自覚が無いの？」

文子は会長用に設えられたビジネスデスクの引き出しからファイルを取り出し、パラパラとめくる。

「過去、響子との勝負によつて校内の器物破損が13件。怪我をした学生は5人。これは傷害ね。不良少年と呼ばれるには十分な実績だと思うけど」

甲斐は反論できず黙つて引っ込んだ。

「ああ、あと一部の女子生徒からセクハラが酷いので何とかしてほしいという嘆願書も何通か来てるわ」

「何ですかそれは！ その嘆願書は一体誰から？」

「見たら、多分死にたくなるわよ」

「……じゃあ、いいです」

「そうしなさい。その方がこの十一人も喜ぶわ」

と、文子は引き出しから更に何通かの封筒を取り出した。ちなみに差出人の名前はこちらからばつちり確認できる。

「全員、知ってる名前だよちくしょおー！」

そこに書かれていたのは、甲斐が一度は体育館裏に呼び出したこのある人たちばかりだった。

あらうことか、彼女たちは甲斐の告白をセクハラとして生徒会に訴えたらしい。酷い話である。セクハラなんて。せいぜいキスを求めてぐらいなのに。

「文姉え。甲斐を弄ぶのはそれぐらいにして本題に入らうぜ。今日も稽古だし」

うずくまつて、「みんな俺の純情を踏みにじりやがって」と呟きながら机に涙を溜めている甲斐を横目で見ながら、響子は話を促す。

「そうね。ごめんなさい。本題に入るわ」

文子は手元のファイルを机の引き出しに戻した。甲斐の方からはその引き出しにまだファイルの束がたくさん置いてあるのが見える。元々、甲斐にとって好ましくない情報が書かれたファイルの保管場所である。何か見えても自分にとってプラスになるとは思えないのでは、意識してそちらの方に視線を向けないようにした。

「あなたたちを呼び出した理由は、来週から始まるS/Lの授業についてお願いがあるの」

「お願い？」

響子が不安そうな顔をし始めた。姉からの“お願い”で良い思い出があまり無いのだろう。

「国からの依頼でね」

「国から？」

話が一気に学外の所まで及んで、三人は首をかしげた。

「学園の優秀な生徒を三年を除いた各学年より一名、土日を使った三日間のS/Lの研修を受けさせたいって話で。一年は特に指定は無かったから私が行こうと思つんだけど、一年生は先方からの希望があつてね」

そして文子は、妹を見た。

「響子。あなたを『ご指名なのよ』

「私を？」

驚く響子の隣で、甲斐は内心では納得しながらも、面白くない心境を味わっていた。

国からの指定。響子の評価は学校を超えて認められているという事なのだろう。全日本空手道大会女子の部にて圧倒的な強さで優勝し、助つ人と称して公式試合には出ないものの、あらゆるスポーツ競技で強豪と恐れられる相手に勝利を重ね、公立高校の中では優良とされるこの六文高校の学年首位取得者なのだから無理もない。

やはり響子なのだ。皆から求められるのはこの真田甲斐ではなく。響子を横目で見ると、彼女は唇を噛んで俯いていた。

「断る」

程なくしてハッキリとした回答を放つ。

響子のこの判断は、甲斐にとつて予想できた事だった。

響子はこう見えて目立つ行動というのを嫌う。いや、注目されるのを嫌がるといった方が正しいかもしない。各部活動などの助つ人も練習試合なら参加するが公式試合には頑として出ないし、クラブで推薦されたミス六文の参加なども断つている。空手の全国大会も優勝後の取材なども全部断つていた。

そのような事例と彼女の性格を、長年響子と付き合ってきた文子も当然知っている。

「そうでしょうね」

と呟いただけで、文子はあっさりと次に移る。

「ちなみに、先方からはもう一人指名があつてね」  
なんとなく甲斐は予想がついた。

「真田君。あなたなんだけど」

「俺も辞退します」

甲斐は律儀に片手をあげて答えた。もちろん、一番手の指名で乗り気になれないという気持ちが無いといえば嘘になる。しかし、そ

れ以上に、

「俺はSVでも響子と勝負するつもりです。自分だけ優先的に正式な指導を受けられるような講習は受けたくありません」

扱いのなれた友人に特訓に付き合つてもうう程度ならともかく、一日間とは言えプロから講習を受けた後で得るアドバンテージなど気分の良いものではないし、何よりフェアではない。

隣の響子が小さく笑つた。

「何だよ響子」

「別にい。素直に受けとけばいいこと思つただけ」

「ほつとけ。俺は俺のやり方と考え方でお前に勝つ」

「そうかよ。今度は何を奢つてもらおうかな」

とても楽しそうに言ひ響子を、甲斐は歯ぎしりしながら睨む事ができなかつた。

文子は、そんな甲斐と響子を交互に見て、

「そうねえ、まあ、そう言つわよね。でも、学校から代表生徒を出すのは決定事項なの。だから、武田君にも来てもらつたんだけど」  
次に文子は机から新しいファイルを取り出して中を見る。ファイルのタイトルは“生徒成績表”であり、通常であれば教員しか見ることができないものだ。しかし、文子はお構い無しに、まるでコンピュード雑誌を立ち読みするぐらこの気軽さで、そのページをめくつていいく。

「武田信一君。あなた運動がかなり得意ね。それに、外国でSVの操縦資格も取つていてる。指名は響子と真田君だけど、あなたでも十分どころか、あなたの方がいいかもなんて思つてね」

手元のファイルを閉じて、文子は信一に体を向けた。

「どう、受けてもらえないかしら?」

信一は困惑した表情で甲斐を見る。

「あ～言つておくが信一。俺は文子さんにお前がSVの操縦資格を持つてゐるなんて喋つてないからな」

「そうなのか」

「諦める。」この学園にいる以上、文子さんの前では個人のプライベートなど無いに等しい」

信一は黙り込んで視線を下に落とした。相当悩んでいるようだ。なんとなく、断る理由を模索しているようにも見える。

文子は無理に答えを促さない。

やがて信一は、

「分かりました」

と観念して小さく頷いた。

「ありがとうございます。助かるわ信一君」

「そうと決まれば、バイトの都合を付けないといけないので、今日はもう失礼します」

「ええ。詳細は追つて連絡するわ」

「それでは、失礼します」

「じゃあな信一」

「ああ、また明日」

信一は甲斐だけでなく響子にも小さく手を振つて、生徒会室から退出した。

「さてと、あなたたちももう帰つていよいよ」

短く応じて、甲斐と響子は席を立つ。

文子は机の端に重ねてあつた書類を自分の方に引き寄せた。席から動かないところを見ると、まだ何かしらの仕事が残っているようだ。

甲斐は、改めて生徒会室内を見渡し、

「ほかの役員は？」

「今日の生徒会は休みよ。私は雑務が残つてゐるから休日出勤」

「大変だな文子さん」

その言葉を聞いて、文子は疲れを込めたような息を吐き、

「『甲斐ちゃん』が生徒会役員になつてくれれば、私の苦労も減るんだけど」

文子は、甲斐を呼ぶときは通常“甲斐ちゃん”と呼ぶが学内では

“真田君”と呼ぶ。なんでも生徒会長として、そのあたりは分別をつけたいからとの事らしい。しかし、今は響子と甲斐しか場にいないので、その分別は必要ないという事なのだろう。

「あ～、考えておきます」

甲斐は苦笑して応じた。正直なところ、これ以上やらなければならぬことが増えるのは、自分のトレーニング時間も確保できなくなるので遠慮したい。

という考え方、文子は当然見抜いていた。彼女はそれ以上のお望みを言わなかつた。

「まあ、いいわ。その分、晩御飯を楽しみにしてるから、ちゃんと

茄子を買って帰つてね」

「了解しました」

「ああ、そうだ。17時から始まるサスペンスドラマを録画していくじゃない？ 帰るのが遅くなりそうなの」

「珍しいな文姉え。いつもはキッチリと録画予約してから学校に来るのに」

「私だって忘れることがあるわよ」

「今日はどんな内容だつける？」

「今日はね」

それからサスペンスドラマの内容について他愛の無い話を始めた姉妹を尻目に甲斐はチラリと壁に掛けられた時計を確認する。

「分かったよ文子さん。録画しておぐ」

甲斐は床に置いた鞄を肩にかける。

「じゃあ、わざと帰るぞ響子。満腹堂に寄るんだが」

「了解」

「満腹堂……」

文子は作業の手をピタリと止めた。

「あの甘味屋の？ 一人で行くの？」

「ええ、まあ」

文子に顔を向けられて、甲斐は小さく頷く。

すると文子は腕を組んで、背もたれに体を預けるとジッとした視線を甲斐に送る。少しムツとしているように見えるのは気のせいだろうか。

「なんですか？」

「別に。じゃあビーチオの件だけど。録画はしなくていいわ。ここで見るから」

生徒会室にも、テレビは据え付けられている。ちなみに、他の教室は安物の特売品テレビだがこの生徒会室に限つて超薄型のハイビジョンテレビである。甲斐は同じタイプのテレビが地元の電気屋で二十万以上で売られていたのを見たことがある。

まえに一度、甲斐は生徒会の予算表を見せてもらつた事があるが、そこに“生徒会特別予算”というのが文子が生徒会長になつた代から組まれていた。よく見ると生徒会室は机、テレビだけでなく、その他備品については良いものが揃つている。もつとも、前にその理由を尋ねても、文子はただ静かに微笑むだけだつたが。

「へつ、なぜですか。別にいいですよ」

「満腹堂に寄つて夕飯の買い物をして家に付くと時間的にはギリギリでしょ。今日は稽古の準備もあるだろつ。学内の備品を私用するのには気が引けるけどここで見るわ」

「悪いな文姉え」

「別に、大したことないから構わないわ」

告げるよう言い放つと、文子はそのまま手元の作業を再開し、それに没頭し始めた。

甲斐と響子は、それ以上の滞在は作業の邪魔になると判断し、教室を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6060x/>

---

セカンド・エース～二番手な少年と一番な彼女～

2011年11月27日12時58分発行